
ブレイズ

柿桑裕樹

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ブレイズ

【Nコード】

N2067D

【作者名】

柿桑裕樹

【あらすじ】

ここは、ある星にある大陸の一つフレジア大陸。その大陸の真ん中辺りにある孤児院。その近くにある丘で二人の子供が遊んでいた。二人は仲良く遊んでいたがそこに黒いコートを着た人が現れて

プロローグ

ここは、ある星にある大陸の一つ フレジア大陸。

その大陸の真ん中辺りにある孤児院。その近くにある丘で二人の子供が遊んで(？)いた。

1人は少年、もう一人は少女だった。

少年は背が少し高く髪は黒で少し短い。温和な顔立ちだった。

少女の方は少年ほど背は高くなかったが160センチぐらいはあり、髪はショートカットで栗色。そして少し強気に見える女の子。

二人とも十代前半。

木刀を持ってチャンバラをしている。

少年は激しく攻撃しているが、少女はたくみにそれを受け流している。

「くっそ〜当たらない……」

「あはは。もつと頑張らないと」

少し疲労で苦しんでいる表情をしている少年に対して、少女は余裕の表情で攻撃をかわし続ける。

と、少女がバランスを崩す　　ふりをした。

「よしッ！」

と声を上げて、大きく木刀を振り下ろす。

少女はにやりと笑みを浮かべそれを避け

「なっ」

スラリ、と自分の攻撃がかわされ驚いている少年の腹に木刀をたたきつける。

ブレイズ

第2話：帰り道

二人が遊んでいた丘と孤児院の距離は約1キロ。その間二人はおしやべりをしながら帰っている。

「そういえばブレイズってこれからどうするの??」

唐突にレミーが聞く。

「え、これから??」

「だから、ブレイズは3カ月後から上級学校でしょう。私は行かなかったけど、あそこって寮なんでしょう?そしたらここに来れないじゃない。」

「レミーも来ればよかったじゃないか。」

首を横に振りながら少しため息をつく

「だめだめ。私はそこまで勉強できないわ。で、来てくれるの?」

「うん。来れたら毎日。」

そう、とうれしそうにレミーは言う。

「じゃあレミーは何をするの?」

今度はブレイズが聞く。

レミーは、うん、とうなりながら考える。

「私は・・・夢が叶うようにがんばるかな。」

ブレイズは首を傾げ

「夢ってどんな夢??」

その言葉を聞いた瞬間レミーは少し顔を赤くしながら途切れ途切れに

「え・・・っと、あ・・・その・・・」

「??? うわあ」

レミーは、バシン!とブレイズを叩く。

「今は言わない。うん。ブレイズが卒業したときに言う。」

「う・・・うん、わかった。でもなんで叩くの??」

「いいじゃないの!」

ブレイズ

ブレイズ

すると次は後頭部に蹴りがはいる。
ブレイズは思いつきり地面に倒れる。
「とりあはずこの話題は終わり。」
地面に倒れたまま
「まあ平和に暮らせたらいっか」
小声でつぶやく。
しかし、そうならなかった。

第3話：特殊部隊

「あれ？あの車はなんだろう？」

二人が孤児院に着いた時そこには高級そうな黒い車が1台あった。

「ここにお客さんつてめずらしいね」

この孤児院は近くの町から少なくとも八十キロメートルはあり、しかもその間には大きな森があり、道を知ってて車があっても四、六時間はかかる。ここに来る人と言ったら食料を運んでくれる車くらいだ。

二人は珍しそうに車を眺める。

車にはなにやら紋章がついている。

「なんたる これ？」

「さあ？　まあいいんじゃないのそんなこと。」

じーと車を見ながら孤児院の中に入る。

「ただいま〜」

中に入るとそこには先生と黒いコートを着た二人がいた。

黒いコートの内一人は背が高く髪は短く黒。少し優しそうな感じがしている。

もう一人は茶髪で少し背が低い。

背の高い方が先生に聞く。

「この子ですか？」

先生は、ええ、と答える。

「君がレミーちゃんだね」

「……………そうですね、あなた達はだれですか？」

冷めた目でみる。

男はそんなことは気にせず、優しい口調で言う。

「私たちは　と、君はなんていう子だい？」

ブレイズを見て言う。

「ブレイズです。」

ブレイズ

男はしばらくブレイズを眺め、

「すまない、ブレイズくん。ちょっと外にいてもらえるかな。」

「え……何ですか?」

「ちょっとレミーちゃんと話があるからだよ。だから話が終わるまで他の子供達と遊んでおいで。」

ブレイズが困った顔をするのみでレミーは言う。

「彼も一緒に聞いたらだめですか?ここには私たち二人しかいないんで。」

「そうか、と男は言い

「では話を言おう。」

私たちは王立特殊部隊学校のものだ。

君は選ばれた。」

「……えつと……特殊部隊つて……なんですか??」

レミーは首を傾けながら聞く。

「特殊部隊は……うーん簡単に言うとなスパイだ。」

「スパイってあの、他国の情報を盗むんだりする仕事のことですか?」

「まあ、そんな感じだ。だがそんなに優しいものではない。我々は、裏で人を殺す仕事もする。」

「……」

黙ったレミーに、男は話を続ける。

「そして、特殊部隊の学校もある」

「……それで……選ばれたって……どういう……ことですか?」

レミーがおそろおそろ聞く。

「我々は、主にこの国の全ての孤児院から抽選で選ぶ。一般人だと情報漏れがあるからな。で、君は選ばれた。」

レミーはいやそうな顔をする。

「・・・行きたくないです・・・」
男はにつこりと笑って

「断ることはできないよ。それは反逆と同じことだからね。わかったかい？」

「・・・」

「これが入学書類だ。入学式は三カ月後。学校までは迎えが来るから安心して待つていたらいいよ。それと」

「僕もそこに行くことはできませんか？」
ずっと黙っていたブレイズが言う。

「・・・なぜ、行きたいのかい？」

背の高い男が聞く。

「それは　僕はレミーと会えなくなるのが嫌だからです。」
ブレイズははっきり言う。

「そんな理由で入学させると思っているのか？」
「おもしろそうだな」

二人の男が同時に言う。

背の低い男が驚いて背の高い男を見る。

「た、大佐なにを言ってるんですか!？」

「この子は自分から入りたいと言っている。入れさせてもいいだろう?」

「し、しかし」

「もちろんタダでははいらせないがね」

背の高い男は笑みを浮かべる。

「・・・何をしたら入れさせてくれますか？」

「そうだな・・・外に来たまえ。」

背の高い男はブレイズを連れて外に出た。

第4話：勝負

外に出て、ガルトスは孤児院から少し離れたところへ行く。その後ろからブレイズとレミー、もう1人の男と先生もついていく。

「今から何をするんですか？」

緊張した声でブレイズが聞く。

その質問を無視して男はブレイズが持っているものを指差して言う。
「う。」

「君は少しは闘ったりできるんだろう？」

「・・・レミーと遊ぶくらいですけど・・・」

男は、にこつと笑みを浮かべて、何も言わずに足で何かを書き始める。それは直径二メートルくらいの円。

「ル ルは簡単。君が私をこの円から出したら入学してもいいよ」

「それでいいんですか!？」

少し嬉しそうにブレイズは言う。もし、本当ならかなりうれしいことである。いつも戦う遊びばかりしていたので、ブレイズは戦いにはだいぶ自信がある。

「ああ、いいよ。 レミーちゃん、君の木刀をかしてくれるかい？」

レミーは木刀をくるりと回して、男に手渡す。

「じゃあ始めるか。」

ブレイズは木刀を中段で構える。

「？」

男はぶらりと腕を下げてままだった。

「じゃあ・・・開始」

男はゆっくりとそう言った。

ブレイズ

ブレイズは開始の声を聞いた瞬間、走り上から下へ木刀を振り下

るす。

男は右手で持った木刀でそれを受け止め、空いている左手でボディーブロー。それは普通の人では見えないほどの速さだった。ブレイズは、まともにくらい、三メートルほど吹っ飛ばす。

「がはっ、ゲホゲホっ、」

しばらくその場で苦しんで、立ち上がる。

「痛ーっ、」

男は少し笑いながら、木刀をくるくると回す。

「今のをくらって、立ち上がるかー、すごいな〜」

「・・・ばかにしてませんか？」

「ん、してないしてない。」

ブレイズは木刀を握りなおして攻撃をする。

ブレイズの左右からの襲ってくる木刀を、やはり片手で持った木刀だけで、すべて防ぐ。

「つく、くそっ」

華麗にブレイズの攻撃を防ぎながらのんびりとした口調で男が言う。

「がんばっているが、それでは当たらないぞ〜」

軽く防いでいたブレイズの木刀を強く下から上へ叩く。そして無防備になったブレイズの身体に左足で蹴る。体がおもしろいように飛び、どさつと地面に倒れ蹴られた時に手からふつとんだ木刀が近くに落ちる。

見事なカウンターだった。

「・・・終わったかな？」

そう言った時、ブレイズは苦しそうに起き上がる。

「・・・やっぱ強い・・・」

それを見て男は感心する。

「すごいな。普通の人だったら気絶してるぞ、うん」

はあ、とため息をつくブレイズに

「大丈夫？」

ブレイズ

ブレイズ

レミーが心配そうに聞く。

「うん・・・大丈夫」

「ちょっと使うねレミー」

「・・・うん」

ブレイズはよしっと言つと深呼吸をする。

「何をするつもりだ？」

男の問いに答えず両手を握り、そしてそれをゴシツツとあわせる。

「おもしろいことですよ」

笑つて言った。

第5話：決着

そして　　ブレイズが消える。

「!」

いつの間にかに男の目の前に来ていた。周りから見ると、瞬間移動したように見える。

ブレイズはまず普通の人では見えないほどの速度で右ストレート。男はそれを屈んで避ける。

ブレイズは、右ストレートの勢いを使って、腰を下げ体を回転させて左足で回し蹴りをする。当たる寸前で男は左腕でそれを防ぎ、そこから腰を伸ばし右アッパーを出す。ブレイズにバック転をされてかわされる。

この動きは男と同じくらい、全て常人では見えないほどのスピードだった。

「あの子　　気が使えるのか!？」

外で見ている背の低い男が驚く。

気とは、戦いの達人くらいにしか使えることのできない、この大陸の神秘の技である。使えば、身体能力が飛躍的に上がった。他にも普通の人には出来ないようなことが出来るようになる。だが、5年間以上みっちりと気の修行をしないと身に付けられないもので、特殊部隊員でも、使えない人は多数いて、14歳の少年が使えるものではない。

ブレイズは息を長く吐いて、ファイティングポーズをとり静かに言う。

「すみません、ちゃちゃと早く終わらせたいので、次で終わらせますよ。」

この宣言に、背の高い男は笑みを浮かべながら聞く。

「どうやってやるんだい？」

さっきまで、互角に戦っていた相手に次で終わらせると言われ

ば、かなりの興味がわく。

さて、どんな手で来るのかな？

男は少し身構える。

「それは」

ブレイズは少し笑い、そして、またブレイズが消え

『「ごうやるんです」「ごうやるんです」「ごうやるんです」「ごうやるんです」』

「！！」

男の周りにブレイズが四人、前後左右あらわれた。そのまま四人のブレイズが右ストレートをする。

だがそれは空を殴っただけで終わった。

「え？」

驚いているブレイズの後ろに男はいた。

その動きは、ブレイズでも見ることはできないスピード。ということ、さっきまで男は手加減をして闘っていたという事だ。

「くそっ」

自分の一番良い技がはずされたことで、小さな声で悪態をついた瞬間、

「はっはっははは！」

いきなり男は大きな声で笑だした。

ブレイズ

なぜ笑うのかと不思議に思ったブレイズは気づく。

大きな声で笑っている男は円の中から出ていた。つまり、ブレイ

ズの勝ちという事に。

「分身するとは、びっくりしたよ。かなり気の扱い方がうまいな。分身は熟練者でも難しい技なんだぞ……君の勝ちだ」

「じゃあ……！」

ブレイズは期待を込めた声で聞く。

「入学させてもらえるんですね!？」

男はコクリとうなずきいて、自分の首からアクセサリー、金色で丸い形をした物をブレイズに渡す。

「君は本来は入学できない人間だから書類などは無い。だから入学するときにこれを出したらいいだろう。これを渡せば、ちゃんと連れて行ってもらえるはずだ」

ブレイズはそれを受け取り、自分の首にかける。

「あ、ありがとうございます。えっと」

名前をきいていなかったなので、言葉が途中で止まる。

男は笑みを浮かべながら手を差し出してきた。

「私はガルトスだ。よろしくブレイズ君」

ブレイズも笑みを浮かべて答える。

「よろしくお願います!ガルトスさん」

そして握手をした。

第6話：それから

ガルトス達、特殊部隊員の人は孤児院の先生にブレイズも特殊部隊学校に入ることの説明し、入学式の一週間前に迎えが来ることを伝えて何か書類を渡し、笑みを浮かべる。

「では、また会おう、ブレイズ君、レミーさん」

そう言い、すぐに帰って行った。

ブレイズは、その後自分の部屋に入り、何をしようか考えて何も考えつかずにベットに仰向けで寝転がる。

ポケットからガルトスに渡されたアクセサリを取り出し、それを眺める。それは、金でできていて、宝石が埋め込まれている。

僕の外にあれを使える人がいるんだなあ　まあ他の力は使えないとは思っけど……

そして机にある二つの物を見る。捨てられたときに一緒においてあったもの、親が唯一残したもの

それを取るう手を伸ばしたその時、ドアがノックされる。

「ブレイズ、入って良い？」

外からレミーの声が聞こえてきた。

「うん、いいよ」

ドアが開き、レミーが入ってくる。レミーの表情は少し悲しそうな感じをしていた。

ブレイズは起き上がってベットにすわり、レミーは机のいすに座る。

「大変なことになったね」

ブレイズがため息をついて言う。

「そうね……」

レミーも、少しくらい声だ。

しばらく二人とも黙り、静かな時間が流れる。

「ねえ、ブレイズ」

ブレイズ

「ん、なに？」

「学校つてどんなところなのかな」

いきなりそんな質問だったので、ブレイズは、うーんと考え、わかんない、と答える。まあ、行った事もないので当然である。

「そっか・・・」
ねえブレイズ、ちよっとお願ひがあるんだけど良い？」

いきなりまじめな顔になって、レミーが尋ねる。

「うーん、内容によるけどいいよ」

レミーはしばらく黙ってから言う。

「私にさ」

「どうしますか大佐」

「・・・」

森の中に一台の車があった。それは森の中にある分かれ道で止まっていた。車の中には、ガルトスと部下の男がいた。

部下の男がガルトスに対して怒っている。

「まったく大佐がコンパスは要らないとか言うからですよ。道が分からないうじゃないですか」

「・・・」

彼らは道に迷っていた。

ブレイズ

うっん、とガルトスは頭を抱えて悩んでいる。

それを見て、部下は、ハアとため息をつく。

遠くから、鳥の声がガルトス達を馬鹿にするように聞こえてくる。

「大佐は……あの子が気を使えることを知っていたのですか？」

しばらく時間がたって、不意に部下が聞く。

ガルトスは首を横に振りながら、

「いや。でも何かあの子から感じたんだよ……こう……危
なそうな何かをね」

「危ない……ですか」

「ああ、そうだ。しかし今年は良い人材がたくさん入ってくるな。フォーレスの子供、我国の子供、万物使いとおもしろそうな子ばかりだ」

くくと笑うガルトスはどこか恐い。

「そうですね……」

「だから、あの子を入学させることができてよかった。あの子は訓練すれば絶対に私よりも上だろう」

「……」

部下はこの大陸で3番目に強い男がいった言葉に驚く。

「だから、これからが楽しみだ」

「そうですね……」

男はしばらく黙りまた聞く。

「で、これはどっちに行きます？」

目の前の分かれ道を指差す。間違えると、変な場所に行くかもしれない。

ガルトスは悩み、しばらく黙って、だいぶ考え込み、

「……右」

車は右の道に進んでいく。

「ねえ大佐。この道合っていますかね？」

「さあ？合っているんじゃないかね」

投げやりな返事。部下はまたため息をつく。

ブレイズ

そして目的地とは反対の場所に進んでいく

んでいた。

「私は特殊部隊員のウォンです。お迎えに来ました」

飛行機の中から出てきて、右手ですばやく敬礼したのは、二十代前半の男。ガルトス達と同じ黒いコートを着ていた。

小声でブレイズ達は会話をする。

「ねえ、ほんとに飛行機乗るのかな？」

「乗るんじゃないの？」

ウォンがバックの中から書類を出す。どうやら、なにかいろいろと名前が書いてあるようだ。

「すいませんが渡した書類の中にあつたカードを見せてもらえますか？」

その書類を見ながら、ウォンがレミーに聞いてきた。

レミーはポケットの中から小さなカードを取り出してウォンに渡す。

それを見てウォンは、

「レミーさんですね。では、飛行機に乗ってください。ここには他にいませんよね？」

ウォンが手に持っていた書類を見ながら言う。

「え？・・・ちよ、ちよと待ってください。僕もいきますよ！」

ブレイズは慌てて言う。

ブレイズ

「え〜と、名前は？」

「ブレイズです」

ウォンは何枚もある書類をゆっくりと見る。

しばらくたつてから、

「……………ないですね。勘違いじゃないんですか？」

このままでは、入学させてもらえそうにない不陰気を男が出している。

「ほらこれ、ガルトスさんに渡されたものです」

首にかけてあったガルトス渡された金色のアクセサリーを取り出し、それを見せる。

ウォンは目を丸くして驚く。

「……………これは校長の…………… はあ……………あの人また勝手なことを……………」

頭を抑えながら愚痴をこぼす。どうやら、ガルトスはわがままなことばかりしているらしい。

「 わかりました。あなたも来て下さい。 」

「ありがとうございます」

ウォンはまたすばやく敬礼をすると、飛行機の中に入っていった。残った二人は玄関にいる先生、ここに残る唯一の人頭を下げる。

「今までありがとうございます、先生」

「ありがとうございます、サヤ先生、また此処に来ます」

サヤと呼ばれた先生は二人を抱きしめる。

先生の声は、震えていたが、しっかりとした声だった。

「がんばって生きなさい。もう自分のことは自分で決めること。そして道は開けると思うわ。」

そして 強くなりなさい」

「はい」

二人は泣きそうな声でうなずいて、最後にもう一度だけ家を見ると、飛行機の中に入っていった。

ブレイズ

第8話：到着

「うわっ、すごい。空飛んでるよ、私達」

レミーが窓に頭をつけて外を眺めている。その横にブレイズは来て、一緒に外を見る。

「うん。いい眺めだね」

ブレイズは太陽の位置を見る。二人を乗せた飛行機はどうやら西へ飛んでいるらしい。外を眺めながらブレイズはウオンに聞く。

「そういえば、学校ってどこにあるんですか？」

「まず、ひとつ言っておきます。特殊部隊のことはもちろん機密なので、この事を普通の一般人には言わないこと。まあ、学校にはただの一般人はいませんけどね。」

私達の学校は、西にあるかなり大きい島にあります。どこら辺にあるかは、あとあと授業で習うのでその時に」

そうですか、とブレイズは呟く。

「そこまでは、後どのくらいで着きますか？」

次にレミーが聞く。

「そうですね……途中で休憩などしながらいくので、早く着いて四日ですね。遅くても五日で着きます。まあ、大丈夫ですよ。入学式は一週間後ですから」

「そうですか」

「退屈かもしれませんが、がんばって耐えてくださいね」

日記

一日目。私達は孤児院を出発した。とても悲しかったけど、レミーがいるから大丈夫。一緒にがんばらないといけないな。初めて見た空からの地上はとってもきれいだ。ただ、乗っている間はかなり暇だったのが残念。夜。国軍基地で休憩。次の出発は明日の朝八時。

ブレイズ

二日目。朝起きたら、まだ真っ暗だったので、暇つぶしに筋トレと気の練習でもしておいた。そういえば、ガルトスさんは、気と言っただけでガルトスさんが使っていたのとは何か違うような気がする。その後、レミーと知らない女の人（軍の人）が僕を呼びにきた。それから空の旅。で、また別の基地について休憩。

三日目。今日も朝が早かったので、筋トレと気の練習。そして空の旅。しかし、まあ、世界はすごいな。いろいろな川、山、草原などかなりきれいなもので溢れている。僕達を捨てた世界だけど、とてもきれいだ。

四日目。到着

ブレイズとレミーはある島に着いた。飛行機から車に乗り換えて、そのまま西へ、島の中心へと近づいていく。

それから一時間過ぎ、

「さて、着きましたよ。此処が学校です」

ウォンがそう言う。ブレイズとレミーは学校を見る。

「うわっ、でか！」

レミーが素直な感想を言う。

学校の校舎は六階まであり、横の長さは八百メートルくらいある。

ブレイズ

他にもいろいろな建物が建っている。学校の周りには二メートルくらい高さがある柵があり、それは横にずっと続いていた。

「学校の大きさは約三キロあります。驚きましたか？」

ちよつとニコニコした口調でウォンは言う。

「は、はい。驚きました……。やっばすごいね。さすが国立」

「国立は関係あるのかな？レミー」

「あはは、君達はやっぱりおもしろいね。内します」

今から、寮に案

そして、二人は学校へと入っていく。

第九話：部屋

校舎の中も、かなり広く、廊下の幅は三メートルくらい、高さは五メートルくらいの大ささだ。廊下に物は置いていないので、余計に広く感じる。階段も同じくらいに広がった。

校舎の中を通り、別の建物の中に入る。

「ここが寮です」

校舎の廊下とあまり広さは変わらない。違うのは廊下にいろいろと物が置いてあることだ。

階段を上がり、六階まで行く。

「ここが一年の男子寮のスペースです」

ブレイズは案内された部屋に入る。

部屋は広く、孤児院にいた頃の部屋の二倍は軽くあった。

壁は石造りで、窓は一つだけ。机とベットが二つ。それぞれ部屋の隅にある。部屋の真ん中には暖炉があり、その横にソファが二つあった。

一つの机には、既に荷物が置かれている。

「二人で一つの部屋となります。ここにはもう一人来ています。まあ、仲良くなってくださいね」

ブレイズは部屋の中に入り、荷物を空いている机の横に置く。

そして、ふと何かを思い出したようにブレイズは言った。

「そういえば、ガルトスさんはどこにいますか？ このペンダントを返さないといけないので」

「大佐なら、たぶん校長室に居ると思いますよ。後で案内します」
「わかりました。その案内してもらつまで、僕は何をしていけば良いですか？」

「そうですね、レミーさんを女子寮まで案内した後ですから、すぐだと思えますけど。何かしたいというのなら、何でもしていいですよ」

「わかりました」
ウォンはレミーをつれて部屋を出て行った。

ブレイズは二人が出て行った後、荷物の整理をしだした。と、机を見てみると、学校案内と書かれた紙を見つけた。ブレイズはそれを読み、自分のポケットに入れる。
「何しても良いって、言ってたよね」
そんなことを呟っていた。

ブレイズ
「レミーは、女子寮に案内された後、ブレイズのところに戻りに行った。」
「そういえば、私の部屋にも誰か来るんですよね」
「はい。女子寮は一部屋三人ですね」
「そうですか。 ウォンさんも孤児院から来たんですね？」

いきなり質問の種類が変わったので、少し時間が経ってから、ウオンは返事をする。

「ああ、そうですね。私も七年前、こんな感じに案内されていました」

「へへ。何で敬語なんですか？」

「それは、入学生が入学するまでは敬語という決まりがあるんですよ。でもなんでそんなことを聞くんですか？」

「いえ、なんか敬語で話されるのって、なんか気持ち悪いんですよ」「そうですねですか……でも、決まりなんで、入学するまでは我慢してくださいね」

そう言った時に、ブレイズの部屋に着く。

ウオンはドアをロックする。

「ブレイズさん、来ましたよ」

中からは何も返事はない。

「？ 入りますよ」

ウオンがドアを開けると。

「あれ？」

そこには誰もいなかった。

第十話：校長室

「ええ〜つと．．．．．ここを右かな？」

ブレイズは、学校案内の地図を見ながら、うろつろと歩いていた。否、迷子になっていた。

「たぶん、あれがこれ．．．．．かな？」

地図で見ている所とは、まったく違う場所を歩いているのに、まったく気づいていないブレイズ。

三十分後　　。

「やっと着いた．．．．．と思う」

上についているプレートには、校長室と書かれている。

ブレイズはドアをロックした。

「どうぞ〜」

中から、三ヶ月前に聞いた声が返ってきた。

ブレイズは、少しだけ何か考えて、ドアを開けた。

そのこの部屋は、かなり広かった。寮の部屋の二倍はある。両端に本棚がたくさん置いてあり、奥の方に机とソファがあり、机の上には何やら紙がたくさん詰まれている。

その机には、一人の男が、紙を何やら眺めて、その紙にさらさらと文字を書いている。白いシャツに黒いコートを羽織っている。

「失礼します．．．．．」

ブレイズは、ゆっくりと部屋の中に入った。

男は顔を上げずに、手を動かし続ける。

「何の用だい？ 大尉。私はちゃんと仕事をやってるよ。うん」

男は、かなり早口で喋る。

「えっと、あの．．．．．」

「ん？」

ブレイズ

男は顔を上げて、初めて別の人間がいることに気付く。そして、感嘆の声を上げる。

「おお！ ブレイズ君じゃないか！」

「お、お久しぶりです……ガルトスさん」

ブレイズは首にかけていたペンダントを取り出して、ガルトス渡す。

「これ、お返しします」

「ん？……ああ、そうだったな」

ガルトスはペンダントを受け取り、自分の首につけて、シャツの内側に入れた。

「それでは、お邪魔しました」

ブレイズはそう言い、部屋から出ようとしたが。

「待ちたまえ。少し話をしようじゃないか」

「え、あ……はい」

「まあ、そこに座りたまえ」

机の前にあるソファーにブレイズは座る。

「さてさて、私には君に聞きたいことがある」

ガルトスは低い声で、ブレイズに質問する。

「まず、何故君は気を使うことができるのか。いや、少し違つかもしれないが、それは置いておく。さて、答えたまえ」

何故気になるのが、ブレイズには分からなかったが、答えることにする。

「僕が気を使うことができる訳は、“自分の扉”を開けたからです」

「“自分の扉”？　なんだそれは？」

「それ説明するのは、話が少し変わります。僕は生まれ

てすぐに、孤児院に捨てられていたそうなんです。捨てられたときに、いっしょに置いてあった物があった、それは一つのペンダントと一冊の本でした。その本は白紙だったんですが、僕が七歳になったときにいきなり文字が浮かび上がったんです。その文字は知らないはずなのに、僕には読めました。それが気の使い方だったんです。

それを見て、僕は気を覚えました」

長い言葉を一気に言う。

ガルトスは、ちよつと納得したように頷いた。

「なるほどな。 その本は今どこに？」

「僕が持っていますよ。でも、他の人には読めないみたいです」

少しがっかりしたように、ガルトスは息を吐いた。

「そうか……わかった」

「でも、何でそんなことが知りたかったのですか？」

「それはだな」

ガルトスが言おうとしたときに、ドアがロックされた。

「失礼します」

と、中に女性が入ってきた。年は二十代半ばで、金色の長い髪をしている。背はガルトスよりも少し低いくらいだ。

「また仕事をサボっていますね、校長」

女性が厳しく言う。

「仕事をしないと、上にいろいろと怒られますよ。」

この子は誰ですか？」

部屋に入ってから大分たっているのに、今頃ブレイズに気付く女

性。

「彼は私に借り物を返しに来たんだよ」

ブレイズの代わりにガルトスが答えた。

女性はブレイズをまじまじと眺める。

「見ない顔ですね。新入生ですか？」

「あ、そうです」

「新入生に何を貸したんですか、校長？」

ガルトスは、ペンダントを女性に見せる。

女性はそれを見て驚いた。

「これは、校長の！？」

「そうだよ。詳しく言うとも長くなるのでまた今度ね」

「どうせ、また何か勝手なことをしたんでしょう。しっかり、話は

第十一話：射撃場

レミーはブレイズを探していたが見つからないので、仕方なくウォンに学校の案内をさせてもらっていた。

教室、売店、食堂、職員室、広場、グラウンド、図書館、闘技場などいろいろな場所を案内させてもらった。

「え〜と、ここが射撃場です。ここでは銃の練習をします」

ウォンは射撃場と呼ばれる場所を指差した。

その建物は、かなりの大きさがあり、一キロくらい幅を取っていた。

「……銃って何ですか？ 初めて聞くんですけど……」

ああ、とウォンは呟く。

「銃とは最近できた武器でね。まだ、特殊部隊の人間しか持っていない物だよ。どんなものかは、見たほうが早いな」

ウォンはそう言うと、射撃場の中に入っていった。

レミーも付いて行く。

建物の中にはたくさんの扉があり、そのうちの一つに入っていく。

「ここが、練習するところの一つ。一番簡単な練習だけだね」

その部屋は、横が十メートルくらいで、縦が二十メートルくらいの部屋。縦に五つに区切られている。

そして、その奥には人の形をした、板があった。

ウォンが腰から、何やら変な形をしたものを取り出す。それは、

大きさは三十センチくらいの物。

それをレミーに見せる。

「これが、銃です。銃の中で“拳銃”と呼ばれるものです。銃の中では一番使いやすいです」

「これは……何をするためにあるんですか？」

レミーは銃をまじまじと見ながら言う。

「これは、人を殺すための道具だよ」

「そんなものが人を殺せるんですか？」

「……そうです。今から見せてあげます。これの威力を」

そういうと、ウォンはその拳銃を人の形をした板に向ける。

すう、と息を吸い込んで、出っ張った部分を引いた。

ドガン、とすごい音がして、ウォンの腕が跳ね上がる。

板には小さな穴が開いていた。

ウォンは拳銃とやらを腰に戻して言う。

「これが、銃です。火薬で鉄の弾を飛ばすものです。弓より早く使え、さらに強力な飛び道具で、簡単に人を殺すことができます。これについてはまた授業で習いますよ」

「……それで人を殺したことがありますか？」

「ありますよ、って答えますね」

「……そうですか」

残念そうにレミーは呟く。

それを見てウォンは事務的な口調で言う。

「この裏の世界で人を殺さない人なんていません。というか、相手を殺さないと自分が死んでしまいます」

黙りこむレミー。

ふう、とウォンはため息をついて

ブレイズ

「それを変えるのが、あなた達でしょう」

レミーの頭に手を、ぼんと置いて言った。

レミーは目をきょとんとしている。

「正直私もこの裏の世界を壊したいんですけどね」

「.....」

「こんな事を言ったのがばれたら、たぶん私殺されますね」

それは、特殊部隊そのものを壊したいということにも考えられてしまう。

ニコと笑ながらレミーと頭から手を離す。

「それでは、次の場所を案内しますよ」

レミーが彼の本音を聞いたのはこれだけだった。

レミーとウオンはその場所から出て行った。

第十二話：迷子を助けた少年

レミーとウォンが射撃場にいた少し前

ブレイズは、また道に迷っていた。

「あれ？　ここ右じゃなかったけ？」

そんな風にぼやきつつ、しばらくさまよい続けた。

すると

「こんな所、あつたけ？」

寮とはまったく逆の方向にブレイズは行っていた。

「うーん、何処だる此処？」

まあ、なんとなく歩いたら

着くかな。それが、魔法使いが連れってくれるかもしれない。だね」

ブレイズは少し現実逃避をしている。

ひとまず、何となく反対の方に行こうとブレイズは振り返ると。

どん！

「わっ」

「いてっ」

後ろから来た人とぶつかってしまった。

「いてて……」

後ろから来た人は少年だった。

髪の色は若いのに白色で、長さは耳に掛かるくらいの短髪。ただし、ぼさぼさ。瞳の色は銀色。背の高さはブレイズより少しばかり高い。

その少年は

頭を打ったらしく、頭を抑えてしゃがんでいる。

ブレイズ

「あ……すいません」

ブレイズは素直に謝る。

少年は手を振って答える。

「いや、別に良いよ。よそ見していた俺も悪いし」

少年は立ち上がると、ブレイズをまじまじと見る。

「ん……もしかして、新入生か？」

「え……はい、そうです」

「そうか　俺も新入生だ。ま、よろしく」

「よろしくおねがいます。……あのう、寮ってどっちですか？」

「あゝ、と、向こうの方だぜ」

ブレイズが歩いてきた方向を指差す。

「え!？」

驚いているブレイズを見て、何かを察する少年。

少年は頭をかいて、ブレイズに言う。

「よかったら、寮まで案内してやるぜ。そっちに行く予定だったしな」

「え、あ、ありがとうございます」

「いいって。あとさ、敬語やめてくんない？　恥ずかしいし」

「あ、うん、わかったよ」

そして、二人は寮へと向かう。

ブレイズ

「はい、ついたぜ」

その後、ブレイズは案内されて、あっさりと寮に着いた。

「僕って、やつぱ方向音痴かな……?」

「なんか言ったか？」

「いや、何でもないよ」

少年は、少し、目を細めたが、まあいいかと呟く。

「で、何処の部屋なのか？」

「えっと、奥から四番目だったかな」

ブレイズはそう言っつて、奥から四番目の部屋の前に行く。

「あつ、ここだよ」

ドアを開けると、先ほど置いた荷物がそのままの状態であった。

ブレイズは少年に向き直り、ぺこりと頭を下げる。

「案内してくれてありがとう」

「ああ。 だが、ここは俺の部屋でもあるぜ」

少年は部屋の中に入り、ソファに座る。

「え……。あ、という事は、同じ部屋の子？」

ブレイズは目をパチパチと瞬きして驚いている。

「そうみたいだな」

少年はあんまり驚いていない様子。

そうか、とブレイズは呟いてから、部屋に上がり、少年の前まで

来る。

「じゃあ、よろしく。僕の名前はブレイズだよ」

そして、手を差し出す。

少年はニヤ、と笑いながら、その手を握り返した。

「俺はザクって名前だ。よろしくな」

第十三話：元帥

「これで大体の案内は終わりました。お疲れ様、レミーさん」

「ありがとうございました」

レミーは学校のほとんどの場所を案内されてもらい終わって、自分の寮に戻っている途中だった。

「……レイズは一体どこにいったんだろ？一回も見かけなかったしなあ」

「分かりませんね。でも、もう部屋に戻っているかもしれませんよ」
「かも知れませんが。もし、居たら一発殴ろっと」

怪しい笑みを浮かべるレミー。

「そ、そうですか。あ、そういえば、レミーさん。二つほど言っておきたいことがありますね」

「えっと、なんですか？」

「まず午後七時から男子寮には立ち入り禁止です。後もう一つは、今日行った施設を使う場合は、その建物内の管理人に一言、言ってから使ってください」

「分かりました。覚えておきますね」

レミーはコクンと頷く。

そして、レイズの部屋へと向かうことにする。

レイズ

レミーとウオンが建物内、職員室前付近を歩いていると、校長室の前に二人の男が居た。

「ガルトスさんだ。声かけよっかな？」 おうい、ガルト

っ

「ちよつと待つてください」

大声でガルトスの名前を呼ぼうとしていたレミーの口を押さえるウオン。

そして、ジツとガルトスの横に居る男を見る。

ふいに、ああ！ と何やら悲鳴に似た声を出す。

「どうしたんですか？」

レミーは不思議そうに聞く。

「あ、あ、あれは、ライク元帥！ ああ………来てしまった・

……」

ガルトスとライク元帥と言う人は校長室の中に入っていく。

「あの人誰ですか？」

当然のようにレミーは尋ねる。

「あの人は、ライク・イジューミラス。わずか三十一歳で元帥まで上り詰めた人です。あ、元帥と言うのは、この国に居る特殊部隊員のトップの人です。ライク元帥は歴代の中でも、一番強いといわれていますね。ああ………あの人があるなんて最悪

だ。ここ最近に来てなかったのに……」

どうやら、ライク元帥と言う人は、かなりの嫌われ者のようである。

「その、何とか元帥が来たら、どうかなるんですか？」

「 前来たときは、生徒全員で彼とサバイバル勝負をする羽目になりました。その前は、生徒の中で誰が一番逆立ちを長く出来るか、とか、誰が長く玉乗りが出来るか、などもありました

うわさでは、ガルトス校長と元帥がいつしよにいろいろと考えているそうです」

「ふーん。でも、別にいいんじゃないの？ ただ、玉乗りとかする

だけなんですよ？」

ウォンは吹っ飛んでしまっんじゃないかと思っくらしいに首を横にブンブンと振る。

「負けたら、ものすごく臭い粉をかけられたり、パンツ一丁で校庭を百周させられたり、恥ずかしい歌を叫ばないといけないというものもありました」

それは生徒で遊んでいるだけじゃないのか？

「だからあんまり来てほしくなかったんですよ」

「そ、そうなんですか。……まあ、仕方ないですよ」

自分もそんな人は来てほしくないというのが本音だが。

レミーは心の中でため息をつく、現実世界でため息をついているウォンをつれて、寮のほうへと向かった。

第十三話：元帥（後書き）

元帥は次に何をするんだろうか？

ブレイズ

第十四話：殴られ、蹴られて

「へへ、ブレイズは中部の方から来たんだ。俺は南部の方からだな。中部って楽しかったか？」

部屋にあるソファに寝転びながらザクはブレイズに聞く。

「うん、中部は楽しいかって聞かれても、僕が居た場所は、中部でも田舎の方だから、中部が楽しいって言う質問には答えられないや。でも、僕には友達が居たから、そこでの暮らしは楽しかったよ。先生も楽しかったし。南部の方はどうだったの？」

「ん？ 南部はあれだな、一言で言うなら、暑い。俺、ここに来て本当に春かって思ったんだぜ。南部から見たら、どんだけ寒いんだよって感じ」

「へへ、やっぱり南部の方は寒いんだ」

ブレイズとザクは、部屋に入って握手をした後からいろいろな話をしてた。好きな食べ物から始めて、好きな遊び、どんな勉強をしていたのかなどなど、どんどん話が変わっていった。

「そう言えば、ブレイズっていつから孤児院に入っていたんだ？あ、言いたくなかったら別に言わなくてもいいぜ」

ザクは次にそんな質問をした。

「えっとね、僕は生まれてからすぐに捨てられていたんだって。丁寧に孤児院の前にね。で、親は誰なのかはまったく分からない」さらりとブレイズは言った。

親がどんな人だったのか、どんな顔だったのか、そんな事はブレイズにはまったく分からない。記憶も出来ないような赤ん坊のときに捨てられていたのだから。

ザクは少し怪訝そうな顔になる。

「……悲しくないのか？」

「うん、だって僕には友達が居たからね。それに先生も居てくれた。それにさ、親がどんなのか知らないからそんなに悲しくはないかな。」

例えば、兄弟のいない人に兄弟がなくて悲しいか？　って聞くのと同じだからね」

「っこりとした笑みを浮かべるブレイズにザクは、ふくと適当に言う。」

「ザク本人としては、親を知らないのは可哀想な事だったが、本人がいいなら、別にいいやと考えた。」

「じゃあ、次はザクの番かな。ザクは一体いつから入っていたの？　今度はブレイズが聞き返した。」

「俺は　　」

コンコン

「ザクが口を開いたときに、部屋のドアがノックされた。」

「？　誰だ、この部屋に？」

「ザクがそう言うって立ち上がってドアを開ける。」

「失礼します、ちょっと入れさせてくださいね」

「そういいながら少し乱暴に入ってきたのは、レミーだった。」

「レミーはザクには目もくれず、ブレイズのところへ直行する。その歩く姿は、何だか恐いとザクは思った。」

「そんなレミーにブレイズはニッコリとする。」

「やあ、レミー。いろいろ見てきたの？」

「しかし、その笑顔は少し引きつっている。」

「こんのっ、」

「うわっ、やば………」

「馬鹿あ……！」

「ブレイズは後ろに飛んで避けようとしたが、避ける速度よりもレミーの殴る速度の方が圧倒的に速く、バゴオ、と見事にボディーブローが入り、思いつき後ろに吹っ飛んだ。」

「　　さてさて、どこに行っていたのか吐いてもらおうじゃないの。ブレイズ」

「……………うん。そんな最後の部分を怖い声で言わなくても、僕はちゃんと喋るってば。大体、レミーは何でそんなに暴力的なんだよ。もっと穏便にやった方が、いいと思うのに　　、ぎゃ！」
地面に倒れているブレイズをレミーは容赦なく蹴り上げる。

「早く言いなさい。もっと痛い目にあうわよ」

「わかったから、蹴らないで！」

泣きそうな声でブレイズは言う。

「えっとね、ガルトスさんにペンダントを帰しに行っていたんだよ。ホラ、あの金色のペンダント」

ああ、アレね。と、レミーは頷く。

「それならそうと、私に言ってから行きなさい！　わかった!？」

「うん、わかったよ」

よし、とレミーは納得したような顔になり、部屋から出て行く。

「もし、今度急に居なくなったら　　」

ドアから出る瞬間、

「急所を容赦なく蹴ってあげるからね」

ものすごく恐い声色で、そう言い残すと、ドアをパタンと閉め部屋から出て行った。

しーん、と部屋は急に静かになった。

「……………なあ、今の子、誰？」

ザクの顔はものすごく引きつっている。

「さっき言っていた孤児院の友達だよ。向こうでは毎日遊んでたよ。床に倒れた状態で苦笑いをしながらブレイズは答える。

「そっか……………。恐いな」

「本当は優しいんだけどね。孤児院でも怒らせるといつもやられていたよ」

一体何回ほどやられているんだろうか、とザクは思ったが口には出さない。

「なるほどね。」

まあ、次、怒られないようにな。と言う

か、急所を蹴るって言ってたけど、実際どこ蹴られんの？」

ブレイズ

その問いには答えなかったが、ブレイズは少しカタカタを震えていた。それだけレミーの急所蹴りが恐かった、いや、痛かったのだろっな、とザクは思った。

第十五話：料理を食べに

「なあ、そろそろ飯を食いに行かないか？」

ザクがソファに寝転がった状態で伸びをしながら言った。

「確か食堂があるんだっけ？ でも……少し早くない？」

今はまだ日が沈むか沈まないかぎりぎりの時間だ。ブレイズはいつもはこの時間帯よりも一時間は後に食べている。実際、まだそこまでお腹が減っているわけではない。

だがザクは首を横に振った。

「いや、この位の時間帯に食べておかないと全校生徒が食べに来る時間とかぶるからな。あんまりごちゃごちゃした中では食べたくないだろ？」

なるほど。とブレイズは少し感心したような声を出す。

「それもそうだね。ごちゃごちゃしていると食べにくいし」

「じゃあ行くか。場所は俺が案内してやるよ」

二人はしっかりと部屋に鍵をかけて食堂へと向かった。

「うわっ！ でかい！！」

ザクに案内されて着いた場所はかなりの広さを持った場所でおそらく数百人は軽く入る場所だった。そして、その空間ぎりぎり入るくらいかの縦長いテーブルが十個並んでいる。

「全校生徒が入れるくらいの広さなんだってさ。まあ、そんなに入ったら狭すぎて飯を食べるの時間が掛かるからな」

ちなみに、まだ誰一人としてきてはいなかった。

「へ。それで、どこで注文するの？」

「こっちだよ」

ブレイズ

ザクはブレイズの腕をつかんでこの空間の奥へと進む。

進んでいくと、なにやらカウンターと厨房が見えてきた。どうやら、そこから料理をもらうらしい。

厨房の中では三人だけ人がいた。

「すみませ〜ん。注文していいですかあ？」

カウンターの前に着くとザクは大声でそこに居る人に呼びかけた。瞬間、三人だった人が一人だけになってしまった。

「!!!」

驚いているブレイズは無視して、ザクはその人を見ている。

その人はザクのほうを向くと少しだけ驚いたような顔をした。

「おお、早いね、ザク君。こんなに早く誰かが来るとは思っていなかったよ」

「そう言うヴェナーさんもご飯を一人で仕込んでるじゃないか。他の人はどうしたんだ？」

ヴェナーと呼ばれた人物は、栗色の長い髪を一つに束ねている、背の高い人物だった。着ている服はもちろんコック服。

ヴェナーは肩をすくめながらザクの質問に答える。

「他のやつらは、とあるミスをしたから私が無理やり特訓させている。なに、後一時間もすればここに来るだろう」

特訓⇨拷問と聞こえたのは気のせいだろうか？ とザクは思う。

まあいいや、と言う結論に達して、ザクはヴェナーに言う。

「注文しても大丈夫ですか？ 無理ならもう少し後に来ますけど…」

…

「ああ。別に大丈夫だ。もともと、私だけでも何とかなるしな」

「そう言えばそうでしたね」

ヴェナーの自信に苦笑するザク。

「と、この子は誰だい、ザク君」

ヴェナーはそこでブレイズの存在に気付いたらしい。

ブレイズはその言葉で呆然とした状態から覚醒し、ヴェナーに挨拶を始める。

「僕はブレイズって言います。ザクとは寮のルームメイトです」

「そうなんだね。 よろしく、ブレイズ君」

「よろしく願います、ヴェナーさん」

二人はお互いに頭を深く下げて挨拶をし手いるのを見て、ザクは礼儀正しいなあ、と思っていた。

「で、注文はどうするんだ？」

「あつと、忘れていました。 ブレイズ、何が食いたい？」

「と言うより何があるの？」

そうだな〜とザクは言いながら、カウンターにおいてある『今日のメニュー』と書かれた紙を見ながら言う。

「え〜と、今日はシチューにカレーに牛丼にクリームスパゲッティ、後アジの天ぷらだな。あ、ちなみに全部セットメニューだから、他にもおかずはついてくるぜ」

ブレイズはしばらく悩む。

「 じゃあ僕はクリームスパゲッティにしようかな」

「じゃ、俺は牛丼を食うか。ヴェナーさん、大丈夫か？」

ザクは本当に一人で大丈夫なのか？ と言うことを確認する。

ヴェナーは自信を持った表情で首を縦に振った。

「当たり前だ。私を何だと思っている」

「料理長」

「正解だ。まあ、しばらく席に座って待っている」

そう言うと、ヴェナーは厨房の中へと入っていった。

ブレイズ

第十六話：握手

「ねえ、本当に一人で作るの？」

「まあな。ホラ、見てみるよ」

ザクが指差した先には

「何、あの人数!？」

包丁を持つてものすごい速度で野菜を切っているヴェナー、フライパンで肉を焼きながら鍋を見ているヴェナー、読書をしているヴェナー。ざっと数えただけで二十人は居た。

ザクは少しため息混じりに言う。

「凄いよな、アレ。俺も初めて見たとき、かなりビックリしたぜ。」

分身しているところじゃなくて、わざわざ分身してまで読書しているところにな

かなり無駄な労力だと思っただよな、とザクは付け加える。

確かに、とブレイズも思う。自分が分身出切る数は最高でも五人だけ。一人分身するのにもかなり力を使うのに、その一人に読書をさせているのは、かなり力の無駄遣いだ。

まあ、人それぞれ考えている事が違うんだよね、と勝手に解釈するブレイズだった。

五分後、分身した二人のヴェナーが料理を運んできた。

「はい、お待たせ」

「……やっぱり同じ言葉を、同じ声で同時に聞くとするのは、少しだけ怖いな」

「失礼だな。この人数だと喋る時に口が一緒に動いてしまうんだよ」

ブレイズ

所詮、私もまだまだ修行が足りんと言うわけだ、と少し落胆した声で言っているが、二十人も分身する事は十分凄い事だ。

「……と、そんな事はどうでもいいから早く冷める前に食べてくれ」

「もちろんだ。じゃあ食おうぜ、ブレイズ」

「うん」

いただきます、と二人そろって言い、ブレイズは料理に口をつけた。

と、ブレイズの顔が驚きに満ちた顔になる。

そして叫んだ。

「美味しい！こんなに美味しい料理初めて食べた！」

「だよな。俺もここまで美味しい料理を食った事なかったよ」

ザクもブレイズも幸せ、と言う感じに料理を口に運んでいく。その料理を運ぶ手は止まる事はしなかった。

その二人の食べる様子を見ながら、ヴェナーは嬉しそうに微笑んだ。

「……そういう言葉が聞けて嬉しいよ。しかし、やっぱり良いものだな、褒められると言うのは」

そう言い残し、厨房へと帰っていった。

ブレイズはその背中を見ながら呟いた。

「良い人だね。それに、凄い人だ」

「ああ。いつまでも上を目指しているって感じの人だからな、ヴェナーさんは」

まあ、少し可笑しい所はあるけど、と言うザクの言葉にブレイズは苦笑した。

料理を食べ終えた二人は部屋へと戻る。

「そっぴゃ、お前つてまだ此処を案内されてなかつたんだっけな？」

「うん。本当はレミーと見る予定だったんだけど、ちょっと用事があつたから……」

用事と言つのはもちろんガルトスに会う事だったが。

ブレイズの言葉を聴いて、よし、とザクは頷いた。

「じゃあ明日俺が案内してやるよ」

「え、良いの？」

「もちろん。だって俺ら 友達だろう？」

ニカつと笑うザク。

「……………うん。そうだね」

友達つてこんなに簡単に出来るんだ、とブレイズは思った。

「んじゃ、決まりな。それと、よろしく」

「うん。よろしく、ザク」

握手をするブレイズとザク。

この時が、二人が友達になった時だった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2067d/>

ブレイズ

2009年6月29日20時15分発行